

「上方落語若手噺家グランプリ」10年の支援と成果

若手噺家の登竜門として定着

「上方落語若手噺家グランプリ」は、上方落語の伝統継承と若手噺家の育成を目的に毎年行われている登竜門レースで、今年で11回目を迎えました。2015年にアートコーポレーション株式会社の寺田千代乃社長（現・名誉会長）がアーツサポート関西（ASK）にファンド（寄金）を設け、アーツサポート関西から10年間にわたり毎年50万円を助成していく形でスタート。毎回会場の天満天神繁昌亭（大阪市北区）では前売券が即日完売するほどの盛況ぶり、最終回となる第10回の節目に、寺田氏から11回以降も継続してご支援いただくとの発表があり、存続が決定しました。

参加資格は入門4～18年の若手中心の噺家。40名ほどのエントリーの中から予選を勝ち抜いた8名で決勝戦が行われます。審査は、規定の持ち時間を1秒でも外すと大幅な減点となる厳しいルールによるもの。出場者たちはグランプリを目指して稽古に励み、回を重ねるごとにレベルは高くなっていました。

グランプリ受賞者たちは「こうした機会を出演者全員が喜んでいる。大阪の若手はこんなに頑張っていることを知ってほしい」（桂吉の丞さん／第1回）、「このコンテストで大いに勉強し、成長させてもらった」（桂雀太さん／第5回）、「関西は賞が



第10回の授賞式にて
右から寺田千代乃氏、優勝の笑福亭笑利さん、準優勝の笑福亭呂好さん、
上方落語協会会長・笑福亭仁智さん。（2024年6月19日／天満天神繁昌亭）

少なく東京に受賞歴で負けていたが、これで挽回できた」（桂惣兵衛さん／第9回）。このグランプリは若手の登竜門として今や欠かせない存在。これからも彼らの目標となり続けることでしょう。

若手への注目と革新的なネタにも期待



桂 文珍さん

審査員長・
上方落語協会 若手育成特別顧問

若手の皆さんが注目されて、芸が充実して、前に進んで行けるようにと思っており、そして、落語という伝統芸能を守ると同時に、古典だけではなく、革新的なネタも次々と発表してもらいたいです。

前回までは決勝戦の出番順を事前に決めていましたが、今回からは、当日、お客様の前でクジを引いて決めるというイベント性を持たせました。そのため、演者は出番や客席の雰囲気に合わせて、臨機応変にネタを演じるアドリブ感覚なども重視さ

れます。審査員の方々も、日頃から上方落語をよく聞いていただいている皆さんを新たに人選いたしましたので、良い結果が出ると思っております。

第11回審査要項

- ・対象者は2007年～2021年入門者
（第11回は78名中、エントリー42名）
- ・合計600点（審査員1名あたり100点×6名）で勝敗を決め、得点を公表。
- ・持ち時間は予選9～11分、決勝戦9～12分
- ・優勝賞金40万円。
- ・審査員
桂文珍、恩田雅和（天満天神繁昌亭アドバイザー）、
伊藤史隆（神戸新開地喜楽館支配人）、
熊谷岳志（NHK大阪放送局）、日高美恵（よせびっ編集部）、
福島暢啓（毎日放送アナウンサー）（敬称略）

歴代優勝者

第1回（2015年）

桂吉の丞

（2002年入門／大阪府出身）



第2回（2016年）

笑福亭たま

（1998年入門／大阪府出身）



第3回（2017年）

桂米輝

（2011年入門／奈良県出身）



第4回（2018年）同点優勝

桂米之助（当時・桂ちようば）
（2001年入門／京都府出身）



桂三度

（2011年入門／滋賀県出身）



第5回（2019年）

桂雀太

（2002年入門／奈良県出身）



第6回（2020年）

桂三四郎

（2004年入門／兵庫県出身）



第7回（2021年）

桂小鯛

（2007年入門／岡山県出身）



第8回（2022年）

笑福亭生寿

（2007年入門／奈良県出身）



第9回（2023年）

桂惣兵衛

（当時・桂そうば）
（2005年入門／福岡県出身）



第10回（2024年）

笑福亭笑利

（2014年入門／京都府出身）



（敬称略）

11年目の挑戦で悲願の栄冠

2025年度(第11回)優勝

林家染吉さんに聞きました

11年目に入り新たなスタートを切った「上方落語若手噺家グランプリ」。第1回(2015年)から出場し続け、今年、出場資格(入門18年未満)のラストイヤーで悲願の優勝を手にした林家染吉さんに、その胸の内を聞きました。

ラストイヤーでの受賞のお気持ちは?

若手といわれている間に、どうしても取りたい賞でした。これが最後の挑戦でしたから、「優勝」と聞いた瞬間、ほっとして涙が出ました。実は、年季明け*のときに、師匠(林家染丸さん)から、「お前は不器用で、鳴り物や踊りができるわけでもなく、気の利いたこともいえない。これからどうして生きていくねん」といわれて、「ほな、賞を取れるような噺家になります」って宣言したんです。年季明けして初めて参加したコンテスト「小枝杯」では、2度の月間チャンピオンに輝きましたが、グランドチャンピオンを逃してしまいました。それ以降は、優勝や大賞と名のつくものは何も取れてません。上方落語若手噺家グランプリには第1回から挑戦しており、これまで4回決勝に進みました。特に第9回は準グランプリと優勝まであと一歩でしたので、今回、師匠は泣いて喜んでくれました。

*師匠の付き人として修業期間を経て独り立ちする時期。

クジでトリ(最後の出番)を引いたときの思いは?

すごいチャンスやと思いました。前に出た人たちのウケ具合を見てネタを変えられる“後出しじゃんけん”ができるんです。私には200近くの持ちネタがあります。100超えたら多いといわれるので、かなり多い方だと思います。その中から、怪談噺、人情噺、滑稽噺と、古典・新作含めて6つぐらい得意ネタを準備していました。私のような芸歴の長い者にとって、トリは有利です。コソコソと落語をしてきてよかったと思っています。

笑いの少ない怪談噺を選ばれたのは?

以前、予選で『腕食い』という怪談噺をしたとき、審査員の方から「笑いがいい噺でも、きちんとやれば予選通過できるということとを、お前が示してくれた」といってもらえたことがあり、今回も他の出場者と被らない『高台寺』(幽霊鮎)を選びました。笑わせるところは少ない噺ですが、審査員長の桂文珍師匠から「要所要



所で笑いをきちんと取っていた」と評価していただき、嬉しく思っています。

入門から修業時代の思い出といえば?

大学祭に染丸師匠と染二兄さんが出てくださり、私が前座を務めました。このとき、染二兄さんに褒めてもらって「是非とも、わが林家一門に」といってくださったのを真に受けたのが噺家人生の始まりです。付き人時代には失敗もたくさんしました。ある日、



師匠から「スーパーで鮭を買って、帰りにこの手紙を投函してきてくれ」と頼まれたのですが、何を思ったのか、買った鮭をポストに入れて、手紙を持って帰ってきてしまいました。師匠から、「お前は生きてるだけでおもろいやつやな」と大笑いされました。

師匠は優しさに溢れる人格者です。「いい落語は、いい人にしかできない」というのが信条で、「いい人とは、愛される人や」と教えられました。以来私は、愛される人になるために、感謝を忘れない心を持とうと考えるようになりました。

将来はどんな噺家になりたい?

そうですね、実力と人気に伴って、お客さんが満足してお帰りになる、そんなトリを任せられる噺家になりたいです。新作(創作)落語にも力を入れ、古典落語に新しい笑いを吹き込んでみたいですね。えっ、グランプリを目指す後輩に一言ですか? うーん、頑張れっていうのも上から目線やし…。そうそう、大リーグの大谷翔平選手が球場でゴミ拾いをして、「運も実力のうちで、運を引き寄せるためにやっている」というのを聞いて、私も繁昌亭の周りのゴミ拾いをしたり、進んでトイレ掃除をしたりしてましたね。まあ、こんなふうに、繁昌亭も綺麗になってええのとちゃいますか。

(聞き手:ライター 三上祥弘)

林家染吉(はやしや そめきち)

1981年三重県生まれ。南山大学法学部(落語研究会)を卒業後、2007年に林家染丸に入門。2011年第1回繁昌亭ドリームジャンボコンテスト小枝杯6Rチャンピオン、2012年第2回同杯7Rチャンピオン。